〔別紙２〕

試 験 の 内 容 及 び そ の 結 果

専攻・分野	国際コミュニケーション専攻 日本語学・日本語教育学分野	氏　名	Seda Dedeoglu
試験担当者	主査　教授　坂本　正 副査　教授　高梨　芳郎 副査　教授　宇治谷　映子 副査　上智大学大学院（外部審査委員） 　　教授　清水　崇文		

1.　試験の内容

論文申請者、Seda Dedeoglu の博士学位論文「トルコ人日本語学習者の日本語のコミュニケーション上の問題とコミュニケーション・ストラテジーについて － 再生刺激法を用いて － 」の公開口述試験が 2020 年 1 月 30 日（木）、13 時から 15 時まで K503 講義室で行われた。内部審査委員は、主査が坂本正教授、副査が高梨芳郎教授、宇治谷映子教授、ならびに、外部審査委員として上智大学の清水崇文教授の 4 人である。最初の 1 時間で論文申請者が博士論文の概要と得られた知見を説明し、10 分休憩ののち、約 1 時間、審査委員からの意見陳述、論文申請者との質疑応答が続いた。口述試験終了後、別室に移動し、30 分ほど論文の内容、口述試験に関する評議を行い、合否に関わる意見の一致を得、最終的に結果を出した。主な質問およびコメントの内容は以下の通りである。

主な質問としては、１）英語と日本語のコミュニケーション・ストラテジー（以下、CS）は普遍的で差はないと思うが、どう考えているか。２）この CS 研究が日本語学習にどのような効果があるのか。３）言語資料のコーディングは一人でしたのか。４）コーディングで迷った時に、被験者本人に聞くこともできるが、聞いたのか。５）先行研究の Dörnyei and Scott(1997) の CS の定義では「本人が意識していないといけない」となっているが、母語話者の場合 C 問題が起きた時にどう対処するか、無意識に行っていることが多いのではないか。６）英語の教科書には、CS という言葉は使っていないが CS の内容を反映した記述がよく見られる。日本語の教科書で CS に関してどのような言及があるのか。７）CS の使用は日本語が上達すれば減少するのか。８）色々な CS が使える人ほどコミュニケーション能力が高いと思われるが、この点はどう思うか、と様々な角度から質問がなされたが、論文申請者は、審査委員の質問を十分に理解し、必要に応じて先行研究の例なども挙げ、分かりやすく、説得力のある回答を行っていた。

主なコメントとしては、１）将来の研究課題になるが、CS を使って、C 問題が解決

〔別紙２〕

試 験 の 内 容 及 び そ の 結 果

したかどうかの観点から分析してみると、CS 研究にも日本語の CS の指導にもとても役に立つ。２）日本語教育への提言がもっと欲しい。３）中級から上級・超級にかけて大きな変化があったと書いているが、この研究から CS の教育は初中級で重要であることがわかった。どういう CS を優先的に指導したらいいかなどの提案ができると、もっと研究と教育のインターフェイスができる。４）コーディングするときは、一部でもいいから他の人にもしてもらい、評価者間信頼性を出したら、信頼性がもっと高まる。５）CS は、C 問題が起きた後だけではなく、コミュニケーションを行う前にも使うことがあるので、CS を C 問題が起きた時に使うというネガティブな見方だけでなく、コミュニケーションをスムーズに行うために事前に使うポジティブな CS もあるので、CS の定義にも関わってくるが、今後より総合的な研究を期待したい。５）協力してくれた日本語母語話者にも C 問題が起こり、CS を使っていると思うが、そちらの分析も進めてほしい。６）今後の分析になるが、成功 CS と不成功 CS の分析、更に、１回限りの CS と複数回続いた時の CS 連鎖の研究も期待したい。７）CS 使用は、二者間の親疎関係、年齢、地位などの上下関係、場の公式度などにも影響を受けるので、それらの視点も考慮し、より総合的な研究を期待したい。８）会話のトピックの選択は、使用する語彙に直接影響して、それが CS 使用の頻度に影響する可能性があるので、意識的にトピックをコントロールして調査すると、トピックの選択の方が学習者の日本語能力よりもより CS 使用に影響しているという面白い結果になるかもしれないが、今後の研究に期待したい。９）学習者の日本語のレベルによって、C 問題の内容が変わってきて、それに応じて、CS 使用も変わってくると思われるので、将来の研究になるが、学習者の日本語レベルの差も考慮に入れた調査を行えば、入門レベルから超級レベルまでの C 問題の内容、CS 使用の分析を通して、学習者の日本語のレベルを考慮した CS 指導のあり方などが提案できよう。10）統計分析を行なっているが、データをより慎重に吟味し、さらに妥当性のある分析を行うことを期待する。11）地道な研究で記述も詳細でよくここまで研究したなという印象で、とても面白い研究で、CS の世界の面白さを再認識させてくれた。外国人が書いたとは思えないような文章で困難なく読めた。学会等で研究発表する際にはこの研究の limitation にも言及し、教育への implication などももっと具体的に書けば、より一層いい論文になる、というコメントがあった。

2. 試験の結果

本学位審査委員会は、以上を総合的に判断し、本学位申請論文が博士学位論文としての水準に達していると認め、博士の学位を授与するにふさわしいと判断し、「合格」と判定した。

〔別紙２〕

試 験 の 内 容 及 び そ の 結 果

（以上）